
01メッセージ

紫陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

01メツセージ

【Nコード】

N9707J

【作者名】

紫陽

【あらすじ】

解決屋なるものを営む、一人の少女と僕。

様々な事件、出来事に巻き込まれて、加速していく物語。

交差スル。

「よっちーってさ、没個性だよなー」

そんなことをさらりと言われても正直困るし、其れなりに腹立たしいが、それが事実ならば反論のしようがない。没個性なのは自分も認めるところだ。

「いや、没個性がよっちーの個性だね。多少の矛盾だけど、実際いといとこついてるでしょ」

僕自身のことをなんでも知っていると言うような口振りだけど、確かに僕の存在は複雑なバランスで単純を構築している。深くない。だから君の言うことは概ね正しい。これもまた間違っではないない。

「あたしはそういうところ嫌いじゃないけどね。よっちーみたいな変わってる凡人なんて、そうそう居ないもん。一緒に居てすごく楽しいよ。まあ、それを差し引いてもあたし様みたいな可愛くて素敵な完全無欠美少女が隣にいてくれるなんて、最高の幸せでしょ。よっちーはっぴー？」

彼女は嬉しそうにそう言い、ポケットからトリスウイスキーの小瓶を取出し、口にする。

ここで彼女が未成年だというツツコミは無しだ。そういう常識が通用する相手ではなし、変わりにこうツツコムとする。

「君の何処が完全無欠なんだよ」

うん？と彼女―黒丸王路は意地悪な顔をする。一応簡単に、彼女のプロフィールをば。
くろまるじんろ

外見的特徴は、腰まで届く長い髪、茶髪（ただし、根元5センチは真っ黒だ）、背は標準、より少し高いくらい。そしてなんといっ

ても美人、それはもう、美人だ。モデル並み。それは認めよう。
しかしながら、内面的にはとりあえず色々壊れている、自信過剰で
人格破綻者の上、弱酒乱、我儘でいて寂しがりやだから性質が悪い。
一言で表すなら、常識外れ。人外。異端。そんな言葉が当てはまる
だろうか。それが黒丸王路。僕のオトモダチ。

「じゃあ、あたしのどこが、欠けているって？」

「それを理解できないところ、とかだね。ま、もっと具体的に言えばデリカシーとか常識とか。凡そ本来人間が持つていなくてはならない要素が君には足りないよ」

読んでいた本をパタンと閉じる。そもそもこの会話は何度目だ。彼女はいつも同じ質問を繰り返す。本を読みながら話半分に聞いていても話が成立してしまうのは、このためだ。

「へーん、嫌いだ、そうやって変に大人ぶって、口先で馬鹿にして、ガキのくせして達観したような言い草。だから女にモテナインダゼ」
言い返すと必ずこう食いついてくるのも、いつも通り。モテナイと言言うな。

「はあ。そうかもね」

本には栞を挿して脇に置いて、よいしょと腰を上げる。

「おいおい、よっちーよあ、図星突かれたくらいで帰っちゃうのかよあ。帰んなよ。やだー」

「帰らないよ。ちょっと珈琲淹れるだけだ」

「ああ、なんだよ紛らわしいなもう。帰ったらぶち戻そうと思ってたし。あ、あたくし様にも淹れといってくださいましよ」

もともとそのつもりだよ。と言ってカップを2つ取り出す。

珈琲を注ぎながら、

「そういえば、仕事の依頼がこの前来てたって言ってたけど、どうなったの？」

と聞く。

壬路は「うん」と唸ってから、

「いや、あれはどうも冷やかしかったみたい。多いんだよなあ、最近。やっぱりネットだと匿名性高いしねえ。仕方ないっちゃあ仕方ないけど腹立つわあ。ああ、思い出したらむかつく」

久しぶりの依頼だったのにな。と差し障り無い言葉を掛けてやり、珈琲を手渡す。

「さんくす。珈琲うまつ。あ、ついでにPCつけて。依頼来てるか確認しといて我が助手」

「誰が助手だ誰が。この前だって下着泥棒の取り押さえの依頼でこき使いやがって。相手ラグビー選手だったらしいぜ。通りで力強かった訳だ。お前がやれば暴れる間も無く取り押さえられたるうに」

「あたしは変態嫌いなんだよ。触りたくも無い。悩ましい。悩ましいよ余市きゅん。」

「お前だって随分変態だろ。」
言ってやった。

「ええー。よつちーは別つしょ。なんなら、えつちなこととしてやってもいいぜ。ホレホレ。セクシーダイナマイツ」
そう言っただけを引張って胸元を見せてくる。

「うわーエロいねー。えつちなことはしないー」

「棒読みな上に即答かよ！この朴念仁が！あたし様他の男に行っちゃうよ」

シカトしつつパソコンを立ち上げサイトを開く。

サイト名、黒丸解決屋。

色々突っ込みどころ満載。しかしながらキリ無いので割愛させてもらう。

この黒丸王路。何を隠そう、解決屋なるものをやっている。

解決屋とは、様々なトラブルを解決する仕事なのだ（王路談）

らしい。全く持って意味不明だ。しかし、実際依頼も少なくはない。決して多いとも言えないが、月に数件、多いときは十数件ある。どうやら、あまり人に話せないような事情を抱えた人が駆け込んでいることが多いようで、客層は大半が若年層。しかしまあそれも当たり前といえそうである。ちよつとばかり見識のついた大人ならこんな怪しいところに依頼なんかしないだろう。

抱えるトラブルは人それぞれ。ペット探しから人探し、先刻口走った痴漢退治や、ちよつと危ない仕事も間々ある。依頼は電話、サイトからのメールで受け付けている。

ちなみこの場所、マンションの部屋を色々と弄繰り回して、事務所に改造してある。事務所兼、王路の家だ。許可？そんなものは知らない。ただ、管理人と王路が以前から仲が悪いというのは、この部屋を見れば当然といえる。同情しよう。彼女に巻き込まれる辛さは、この僕が一番良く知っている。

「んお。依頼、来てるぞ。一件」

「マジで？読んで。読んだってよっちー。声の限りに、力強く音読して」

「音読しない。ちょっと待て・・・はあ・・・なんか、そうだな。今回は、ちょっとばかりヤバイ仕事かもしれない」

「なにになに？そんな大変なヤマなのですか？うーんあたくし様困っちゃう」

「どうやら何かの受け渡しの依頼だな。物品の詳細は記載されていないところを見ると、まあ大体は想像つくよな。アングラっぽー」メールには、依頼内容の他には一件の電話番号だけが載っていた。

「どうするよ、受けるのこの仕事？危ないとは思うけど、多分報酬は弾むだろうぜ。多分これどっかのヤクザかなんかの依頼だろ」

「そうじゃなかったら、秘密の地下組織の依頼とか？ヒューかつけえ。いいじゃん、受けようよ楽しいよきつと」

どうやらノリノリだ。しかし僕も実際のところそれほど心配していない。黒丸人路の身を案ずるなど、全くの杞憂なのだ。彼女に対して払う気遣いなどこの世にはこれっぽっちも存在しないのだ。

そんなことを思いつつ、仕事用の電話を借り、パソコンの画面に記されたとおりの番号を押す。

何度目かのコールの後、電話が繋がる。

「はい、こちらベアリアス社」

え？ベアリアス社さんですか？と思わず聞き返しそうになった。とにかくびっくりした。仰天だ驚愕だ。

ベアリアス社・・・日本有数の大企業。いや、日本だけじゃない、世界にもその名を轟かせる程の大大大企業だ。日々の暮らしにベアリアス社が関わらないことはない。電化製品においては、去年、他の大手企業との合併もあり、シェアの大半を占めている、らしい。

最近では保険にも精力的に力を入れ始めていると聞く。

そんな会社が何故？

「……あの？ すいません？ お客様？ でよろしかったでしょうか？」

受話器からの女性の声がふと、思考中の僕を現実に取り戻す。

「あ、すいません。いえ、客じゃないんです。仕事の依頼を引き受けていて。お電話をこちらに掛けるようにと言われておりまして・

・」

「仕事の依頼……ですか？……すみません、少々お待ちいただけますでしょうか？」

かまいませんよ。というと、スピーカーから保留の音楽が流れる。どうやら話がついていなかったらしい。おそらく末端の電話対応職員なのだろうな、と考えていると、割とすぐ保留音が止んだ。

「……すみません、お待たせしました。お電話代わりまして、私、社長秘書を勤めます、筆目愛、と申します」

別の女性の声。社長秘書と言った。社長秘書ってこういった電話に出るものなのだろうか？ 僕のイメージでは、あまりそういうイメージはないなあと思いつつ話を聞く。

「先程は申し訳ありませんでした。まさかこんなに早くご連絡いただけるとは思ってもみなかったものですから……。それに社内も色々とゴタツキがありまして……」

「いえいえ、いいんですよ。……そのゴタツキと、今回の依頼、何か関係が？」

「……ええ……まあ……」

と言葉を濁すカゴメさん。一介の大学生の考えなど及びもつかない深い、込み入った事情でもあるのだろう。と僕は考えた。

「とりあえず、一度会ってお話を。依頼について、詳しくはその時に。今話すとすると……その、盗聴とか、怖いので」

「随分用心なされるんですね。全然こちらとしては構わないですけど。じゃあ日時と場所、はいかが致しましょう?」

「それについては、急で悪いんですが、明日の十五時に池袋のサンホテルでどうでしょうか?」

「あーと、ええ、はい、明日の十五時ですね。大丈夫、です」

「ではその時に。失礼致します」

と先方からすぐに切られてしまった。忙しいのだろうか。こつちとしてはあまりいい気はしないが。しかしまあ、あれほどの大企業からしてみたら、こんな訳のわからない胡散臭い何でも屋など、歯牙にもかけていないのだろう。そう考えると、依頼してきたことも含めて、この対応は優遇されているうちに入るのかもしれない。

受話器を戻して壬路のほうを向いた。

「明日、昼三時に池袋のホテル、だつてさ。サンホテルつて言ったら、三ツ星ホテルだね。流石大企業は違う」

壬路はいつのまにかソファーで寝転びながら煙草を銜えていた。「ほおん」などと気の無い反応。

「なんだよ。やる気無くなったのか? だったら断つてたほうがよかったかな? まあまだ引き受けたとは言つてないし、いくらでもキャンセルできると思うけど」

彼女は紫煙をわっかの形でプカプカ吐きながら首を振った。

「んにゃ。そうじゃあないんだよ。よつちー。たださ、なんで大企業がうちに依頼したのになつて考えてて」

「え? ベアリアス社からの依頼つて言つたっけ?」

「言つてないけど大企業つて自分で言つてたじゃん。ばっかでーい」
あ、確かに言つてました。自分で言つて忘れてた。

「むーん。それにしても、ベアリアスかあ。すげービッグネームきたね。マジなんだろ。ねえよつちー」

先刻から確かに僕も気になってたことである。何故、わざわざうち

に依頼をしたのか。あれほどの会社なら、いくらでも、信用ある手駒や、傘下、または親交のある引渡し業者のような存在がいる筈なのに。単純に考えれば、内部には任せたくない、任せられない仕事であり、あまり表立って事を荒立てることが出来ない為、ということが推察される。

しかしながら、詳しい話が分からないのならば考えても詮の無いこと。

「まー明日話聞けば分かるか」壬路も同じ事を考えていたようだ。

「あ、そういえば」

「うん？どしたよっちー」

「僕明日大学授業あるんだけど」

「休め」

壬路は満面の笑みを浮かべ、親指を突き立ててそう言った。

影二ツ。

時計は午後三時を指そうとしていた。

正確に言つと午後二時五十六分。

僕は今、原付で疾走していた。唐突な話になるが、僕は現在大学生だ。社会人でも、ニートでもない。一般の大学生。解決屋を営んでいるのも、王路であつて、僕ではない。何故だろう、僕が一人で商談に向かつている理由は何なのだろう。この問いに対してスツキリとした回答を僕は切に求める。

そういう訳で、今日はベアリアス社との約束の日。サンホテルに午後三時。

普通、こんなに時間ギリギリで、いやむしろ遅刻しそうな程に遅れた登場というのは、先方に心証が悪いであろう事は自明であり、僕だつてオトナノマナーとして十分に心しているつもりだ。それどころか普段の僕は死ぬほど時間に厳しい。それはもう洒落にならないくらいに。そんな僕が何故遅刻寸前なのかは、言うべくもない、奴のせいである。しかしこれ以上の言い訳は僕の品格を下げる。男は黙つて開口一番、「遅れて申し訳ありませんでした」だ。これがオトナノマナー。

「いや、本当に申し訳ありません」

駐車場から走つて駆け込んできたので、肩で息をしながらひたすら頭を下げる。

「いえいえ、いいんですよ。たかが二分ほどの遅刻じゃないですか。そう言うのは籠目愛さん。眼鏡に黒いパンツスーツ。黒髪ポニーテールという出で立ち。ザ・美人秘書といったところか。となりには痩せたいかにも人が良さそうな中年男性。専務の成田さん。どちらかというと万年平社員な印象を受ける。失礼だが。」

「それでも遅刻は遅刻なんです。しっかり謝罪するのが義務つても

のです」

「潔癖なんですね。解決屋とお伺いしていたので、随分とイメージと違います」

とにこやかな笑顔で成田さんが答える。しかし解決屋ってことで若干蔑んだ発言ではないか今のは。

「あ、いえいえ、すいませんそういうわけではないんです。いやそういうえば、解決屋さんは女性だと御伺いしたのですが、男性なのですね」

僕の心を読み取ったのか、前言撤回をし、話を摩り替える成田さん。よく人間を観ているじゃないか。感心する。不相応な肩書きの裏には、こういう絶妙な人間関係の保ち方があるからこそ、なのかも知れないと勝手に思った。

「いいえ、女性ですよ。解決屋は。僕はお手伝いさんといったところですかね。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9707j/>

01メッセージ

2011年10月6日04時20分発行